



巻頭インタビュー

国際原子力機関（IAEA）事務局長  
**天野之弥**

# 平和と開発のための 原子力

あまの ゆきや  
1947年生まれ。72年東京大学工学部卒業、外務省入省。総合外交政策局科学原子力課長、同局軍縮不拡散・科学部長、ウィーン国際機関代表部大使などを歴任。またこの間、IAEA理事会議長、2007年NPT運用検討会議準備委員会議長を務めるなど、核軍縮・不拡散分野のプロフェッショナルとして高い評価を得ている。2009年より現職。

(Photo: Dean Calma / IAEA)

——イランの核問題が動き出しました。四月二日の「P5+1」の枠組み合意をどのように評価されますか。

**天野** まだまだこれから難しい交渉が残っていますが、ひとまず解決の方向に向けて事態が進んだことは評価します。

これは長い経緯のある問題です。そもそも、イランは核兵

器不拡散条約(NPT)に核兵器非保有国として加盟しています。したがって、イランはすべての核活動を国際原子力機関(IAEA)に申告する義務があり、われわれIAEAは、その申告を検証する責任があります。

二〇〇三年に、イランは申告しないうままウラン濃縮施設を建

設していたことが明らかになりました。これらの問題をめぐって、英仏独(EU3)とイラン政府との間で交渉が始まりましたが、遅々として進展は見られませんでした。こうしたなかで、〇五年にアフマディネジャド政権が成立し、〇六年にはウラン濃縮が再開されるに至りました。この問題は国連安保理に持ち込まれ、イランに対しウラン濃縮・再処理活動の停止を求める国連決議一六九六が、〇六年末には制裁を含む決議一七三七が採択されました。

## 検証可能な「事実」にこそ答えがある

——イラン政府は一貫して核の平和利用を主張し、IAEAや国連安保理を批判してきました。

**天野** イランが、保障措置協定に基づいて申告した核活動に限れば、平和目的といえます。しかし、イランは国連安保理決議を実施していません。また、いわゆる軍事的側面がありうる情報の解明についても十分な対応がありません。したがって、イランの核活動の全てが平和利用だと保証することはできません。

——このタイミングで事態が動いた背景は？

**天野** 二〇一三年八月にロウハニ氏が大統領に就任し、それまでの対決路線から変化が見られました。最初に協調的なレトリックが用いられるようになり、続いて核協議に関する交渉チー

ムの顔ぶれが替わりました。原子力庁長官に前外相のサーレヒ氏が就き、後任外相のザリーフ氏も欧米をよく知る人物です。そして中身についても、一三年十一月にIAEAとの協力の枠組み、さらにP5+1と包括的合意に向けた「共同作業計画」を発表するに至りました。それが四月二日の包括的な共同作業計画の発表につながっているのです。

——アメリカのモチベーションはいかがですか。

**天野** この問題を平和的な手段で解決したいという基本方針は変わっていないと思います。ただ、交渉が進まないいうちは原則論で済みますが、事態が動き始め、この相手とは取引ができるとの感触が得られれば、お互いギブ・アンド・テイクで、という場面が出てくるでしょう。その兆しはあると思います。

ただ、どこの国でも妥協して交渉をまとめようという勢力と強硬論を述べる勢力があれば、強硬派の声が大きくなるものです。また、イランにおいて、ロウハニ大統領が善玉で、それ以外は抵抗勢力、といった単純な話でもありません。アフマディネジャド政権時代から、イランは平和目的の核活動の権利を主張していることに変わりはありません。今後も難しい交渉が続くだろうと思います。

——イランは核兵器開発の時間稼ぎをしているだけだろう、という見方もあります。



2015年2月、最も新しい加盟国の一つであるブルネイを訪問し、がん治療や農業分野での核原子力技術の活用などについて議論した。写真はブルネイ農業研究所で説明を受ける天野氏 (C. Brandy / IAEA)

**天野 時間**

稼ぎかどう

か、「意図」

は検証でき

ませんし、

推測もしま

せん。われ

われがなす

べきは、イ

ランの核活

動がどうい

う状態にあ

るかという

「事実」の

検証です。

ウランの濃

縮やストッ

クなどについて、IAEAが広範囲かつタイムリーな査察を行えるようになればイランの核活動についての信頼性は高まるでしょう。しかし、強力な査察を行えるようになれば、十分と思

## インナーサークルに入り込めない日本

——北朝鮮のケースはイランよりも深刻ですが、欧米の関心は低く、国際世論になっていません。

**天野** 残念ながらおっしゃるとおりです。私がウイーン国際機関担当大使のときには、IAEA事務局が北朝鮮問題を理事会の議題から外そうという動きがあり、アメリカの大使と一緒に猛反対して、議題として復活したことがあります。欧州からみればイランが最大の懸案かもしれませんが、アジアにとつては、そして世界にとつても北朝鮮は極めて重要な問題です。北朝鮮がNPT加盟国かどうかは議論がありますが、加盟国としてふるまっていますし、IAEAからは脱退しています。したがってIAEAが北朝鮮に直接関与するには非常に高いハードルがあります。原則はIAEAの加盟国、なかでも日米韓中露に北朝鮮を加えた六者会合での合意によって、政治的土台をつくる必要があります。そのうえで、寧辺ニョンピョンにIAEA査察官を復帰させることが、解決への第一歩になるでしょう。

——しかし、米国、中国、ロシアあたりは熱意が薄れていて、手詰まり感が強いですね。

**天野** 決して見通しは明るくありません。しかし、いつまでも停滞が続くと決めつけるのもよくないことです。現に北朝鮮は

経済が立ち行かずに困っているし、国際情勢が動くなかで、北朝鮮問題だけが止まったままなのか、それとも何かのきっかけで打開の方向に進むのか。予断を持たずに、注意深く観察しています。われわれの武器は事実の収集と分析です。北朝鮮が寧辺での活動を強化する兆しがあること、イラン情勢に強い関心を持っていること、IAEAと対話を完全に閉ざしているわけではないことなど、さまざまな事実を冷静に分析することが、われわれの貢献なのです。

——日本に対して、何を期待しますか。

**天野** IAEAに対して、これからも協力を強化してゆくことが重要です。言うは易く行ふは難ですが、進展がみられます。東日本大震災での過酷な原発事故を踏まえ、そこに至る「安全神話」への反省もその一つでしょう。9・11以降、核セキュリティについて世界的に関心が高まり、備えが強化されましたが、日本では不十分な面がありました。現在は新たな原子力規制委員会の下で権限が統一され、核セキュリティについての関心も高まりました。今年二月に、核セキュリティの状況をレビューするIAEAのIPPPAS(国際核物質防護諮問サービス)ミッションを受け入れたことは、評価したいと思います。安全基準についても、従来より厳格な基準が設けられましたが、引き続き世界の動向に目を配ることは大切です。

——それまで受け入れていなかったのも驚きですが。

**天野** 核セキュリティの問題につき、それだけ危機感を持って正面から受け止めるようになったということでしょう。世界が日本に学ばべき面もあるし、日本が学ばべき面もあります。IAEAとしては日本の現状を見ただけで勧告を行い、日本がフォローアップする、そういう関係が続けていけばよいのだと思います。保障措置についても同様です。

——余剰プルトニウムなどについて、日本は特別扱いされているという一部からの批判もあります。

**天野** 日本のプルトニウムには保障措置がかかっており、その点では問題はありません。IAEAは平和目的の核物質が軍事用に転用されないことを検証するのであって、平和目的の範囲内でどうするかは、各国が独自に対応すべき問題です。しかし現実には理事会の場で中口が懸念を表明したり、あるいはNGOや学者からもさまざまな議論が出ています。対外的に可能な限りオープンにして、よく説明する努力は必要でしょう。核セキュリティの観点では、IAEAがIPPPASミッションの派遣と勧告を行い、日本がそれを実行に移す、という流れはよかったですと思います。

——これまで以上に積極的な協力関係が求められますね。

**天野** 保障措置の分野に限らず、IAEAのインナー・サークル

ルにも、もつと日本人に食い込んでほしいと思います。IAEAは国際機関といつても、自前では原発はおろかがん病棟ひとつ持っているわけではありません。各国の専門家の協力や施設を活用させてもらう必要があります。

また、IAEAのネットワークは世界に広がっているので、その中に入り込めば世界の流れをリードすることができます。主要国はIAEAの中枢に積極的に外交官や専門家を派遣し、政府関係者、業界、市民団体などを巻き込んだ複雑な政治過程に関与しながら、IAEAをよい意味で「活用」しています。日本は、また「国際機関を神棚に祀り上げていくところがあつて(笑)、そうではなくて、もつとこの組織を利用していくという意識が必要だ」と思います。日本はIAEAではいわば常任理事国で、事務局長を出している国ですから、ここを活用しない手はないのです。

### がん検診、食糧増産……開発機関としての役割

——核の平和利用という点では、IAEAには「開発の担い手」という側面もあります。

**天野** そのとおり、イランも北朝鮮も大切ですが、他方で多くの途上国にとっては、干ばつが広がる中でどのように食糧や水を確保するか、あるいはどのように衛生状態を向上させるか、病気の人を治すか、といった日常的な懸案が山積しています。そ

れらは、ひつくるめていえば「開発」の問題といえますが、原子力技術はそこに大いに役立つのです。二〇世紀半ばにアイゼンハワー米大統領は「Atoms for Peace」と述べましたが、二一世紀は「Atoms for Peace and Development」と言いたいと思います。

——具体的に？

**天野** たとえば、途上国の病気といえ、マラリア、結核、HIV、他方でがんは先進国の病気と思われがちですが、実は世界のがん患者の三分の二は開発途上国です。がんの検診・治療にガンマカメラやPET・CTは先進国では当たり前ですが、途上国には国中を探しても一台もないところもあります。豊かな人は飛行機で先進国に行き治療できるが、貧しい人は検診の手段もないか、あつても長蛇の列という現実。機材が供与され、安全に運用されれば、一台で年間三〇〇〇人の検診が可能になります。

ほかにも、エボラウイルスの検出は、通常の方法では四日かかりますが、IAEAの技術を使えば四時間でできます。生死の境目にいる人にとっては、決定的な差です。食糧の増産についても、ガンマ線を当てることで品種を改良し、収穫量を増やしたり、病気を付にくくすることもできます。これは、遺伝子組み換えとは異なる技術です。これからは、開発を進めてゆくうえでIAEAの役割にも大きな期待がかかります。●